

# 大菩薩峠

竜神の巻

中里介山



天誅組がいよいよ勃発ほつぱつしたのは、その年の八月のことでありました。十七日には大和やまと五条の代官鈴木源内を斬つて血祭りにし、その二十八日は、いよいよ総勢五百余人で同国高取の城を攻めた日。その翌日、十津川とつがわへ退いて、都合二千余人で立籠たてこもつた時の勢いは大いに振ふるつたもので、この分ならば都へ攻め上り、君を助けて幕府を倒すこと近きにありと勇み立ち、よく戦いもしたけれど、紀州、藤堂、彦根、郡山、四藩の大兵を引受けてみて、力が足りないのは是非もないことでした。

侍従中山忠光は浪花なになわへ落ち、松本奎堂けいどう、藤本鉄石、吉村寅太郎らの勇士は、或いは戦死し、或いは自殺して、義烈の名をのみ留とど

めた——十津川の乱の一挙は近世勤王史の花というべく、詳しく書けば、ここにまた一つの物語を見出されようけれども、それはここに必要を認めず。いよいよ、これらの一味の者が散々ちりぢりになつて、或る者は伊勢路へ、或る者は紀州領へ、或る者は大阪方面を指して、さまざまに姿を変えて落ちた後のことであります。

鷲家わしやぐち口の戦いから落ち延びた十一人の浪士が、木にも草にも心を置いて風屋村かぜやというところへさしかかつて、

「ああ、水が飲みたい」

「水が欲しい」

村とはいうものの、ここは十津川郷ごうの真中で名にし負う山また山の間です。十津川の沿岸を伝うて行けばなんのことはないのですけれども、四藩の討手うってが、残党一人も洩らすまじと、夜

となく日となく草の根を分けている際ですから、それはできませんでした。

大日だいにちヶ岳たけへ連なる山々を踏みわけて、木の繁みを潜くぐり潜り歩いて行くのだから、水にも遠くなる。水、水というけれども、木苺きいちじ一株を見つけ出してさえ、十一人の眼の色が変るくらいですから、その腹の応こたえは思いやらるるのです。

「川岸まで戻ってみようか」

眼を見合せて惨澹さんたんたる面かおの色。

「それはよせ、さいぜん鉄砲の音が聞えた。拙者の考えでは、これをずっと向うへ横に切つて、紀州の日高郡をめざすが無事だと思ふ」

「道程みちのりは……」

「風屋——小森——平松——三本磯と行つて、紀州日高郡の竜

神へ凡そ十三里」

「その間の兵糧は……」

「さあ、それが……」

一同は口を噤んで足が動かない。

「おのおの方、あれを見られよ、煙が棚引たなびいている」

沈んだ声で後ろから言い出したのは、あの時以来、何をしていたか、ともかくここまで傷一つ受けずに来た机竜之助でした。翠微すいびの間に一抹いちまつの煙がある——煙の下にはきつと火がある、火の近いところには人があるべきものにきまっています。

「なるほど、煙が立つ、拙者が様子を見て来よう」

村本伊兵衛というのが出かける。

「よし、我輩わがはいも行こう」

荷田かだ重吉がいう。村本と荷田は連れ立って、その煙の方へ行つ

てみます。あとの九人は、木の根と岩角いわかどとに腰をかけて、その斥候ものみを待っています。

「諸君、仕合せよし」

村本と荷田は欣々として帰つて来て、

「山小屋がある、その中には、獵師と見えるのが、炉ろに火を焚いて、何やら獣の肉を煮ている」

「ナニ、獣の肉を？」

肉と聞いて、うまそうな唾つばが口の中から迸ほとばしるようであつた。

「敵の間者かんじゃではないか」

「いや、そうではないらしい、たしかに生はえぬきの獵師と見受けた」

「おしかけろ」

「行つてみる」

村本と荷田は案内する。九人はそれについて行つて見ると、山腹のやや平らかなところを程よくこなして、そこにかなり大きな掘立小屋があります。

「頼む……」

「うあ……」

中で妙な調子の返事がある、面を出したのはまさに獵師に違いない。ずっと前に、はじめて三輪の藍玉屋の不良息子の金蔵に鉄砲を教えた惣太でありました。

惣太は面を出して見ると、都合十一人、筒袖に野袴をつけたのや、籠手脛当に小袴や、旅人風に糸楯を負つたのや、百姓の蓑笠をつけたのや、手創を布で捲いたのや、いづれも劇しい戦いと餓とにやつれた物凄い一団の人でしたから、

「やあ、お前様方は何だ」



「驚くことはない、これから紀州の方へ通る者だが道に迷うた、暫らく休息させてもらいたい」

「へえ、よろしゅうございます、こんな狭苦せまくるしいところでございますが」

惣太は杉板を三枚合せて綴った戸をあけて、中へ一行を招しょうじ入れたが、気味の悪いことは夥おびただしい。

「お前様方は、あの天誅組のお方様でございますか」

「何でもよろしい、そこを締めろ」

「へいへい」

「さあ、獵師、何か食うものはないか」

「別に何もございませぬ、なにしろ、この通りの山小屋でございますからな」

「それは何だ」

「これは猪ししでございます」

「猪！ それは至極しじくよろしい、その猪を売ってくれんか」

「お売り申してもよろしゅうございます」

「よしよし、それでは買おう、鍋もそのままにして、味噌か醬油もあるであろうな」

「エエ、ただいま出して上げまする」

思わぬところで意外の御馳走ごちそう。一行は炉の周囲まわりをかこんで小舎こやいつぱいに拡ひろがって、

「猪の肉とは有難い——獵師、もつと大きな鍋はないか」

「へえ、こちらにございます」

惣太は、いま炉にかけてあつたのより、やや大きい三升焚きぐらいの鍋を押入の中から引張り出して、それから上り口へ寝かしておいた猪の股もものあたりの肉を切りにかかった。

「大きなやつだな、この辺には、こんなのがたくさんいるか」

「へえ、大分いるにやいますがね、近頃は戦争で鉄砲の音がかましいものですから、みんな紀州筋へ逃げ込んで、やつと五日もかかって、こいつを一つ仕止しとめたのでございます」

「そうか、なんにしても有難い、代だいはいくらでも取らせるぞ、早く料理をしてくれ」

「では、こうして丸切りにして、鍋の中へぶち込んで、ぐつぐつ煮立てて進ぜましょう」

「それがよかろう、よかろう」

惣太はよく働いて猪の肉を煮てやります。気味が悪くてたまらないけれども、ぐずぐず言えば、どんな目に逢あうか知れたものでないから、神妙に言われる通りに世話していると、浪士らは寝たり起きたりして肉の煮えるのを待ち構えています。

「おいおい、獵師、黙つていてはいかんぞ、ここに有難いものがある」

磯崎という浪士が、寝ころんでいた自分の枕許まくらもとで見つけ出したのが貧乏徳利びんぼうどくりであります。

「やあ、それを見つけられてはたまりませんな」

「何だ、酒か」

それだけは隠しておきたかった。惣太がいま猪の肉を煮ていたのは、実は取つて置きどぶろくのその濁酒を一杯やりたかつたからであります。肉の方は、いくらでも御用に立てるが、酒の方はかけ換えがないから、それを見つけ出された惣太は苦にがい面かおをしました。

「うむ、獵師、人が悪いぞ、これを隠して一人でこつそり飲もうなどは不届ふとどきだ……一升はしかと認めた、茶碗を出せ、さあ、

おのおの」

肉の煮える間、一升の濁酒は十一人の口を潤うるおしている。

それを傍はたで見ている惣太の顔色はない——惣太が、こんな危ない時世に、山奥へわけ入って猛獣を追い廻しているのも、この一升が生命いのちなのであります。

それをみすみす人に飲まれて、自分は指をくわえながら、料理方を承わっている辛つらさ口惜くやしさというものは容易なものではないのでした。

「猟師、猟師」

肉の煮えた時分に惣太の姿が見えなくなっていました。

「猟師、どこへ行つた」

呼んでみたけれども返事がない、一同は少しばかり怪しんだけれども、さして気にも留めず、それから寄つてたかつて猪の

肉を突く。

「獵師はどこへ行つた」

「逃げたかな」

「逃げたようじゃ、逃げて訴人そにんでもしおると大事じゃ」

「いいや、訴人したとて恐るるに足らん、藤堂の番所までは六里もあるだろう、ゆるゆる腹を拵こしらえて出立する暇は充分」

「よし十人二十人の討手が向うたからとて、かくの如く兵糧ひやうろうさえ充分なら、何の怖るることはない」

「とかく戦いくさというものは、腹が減つてはいかん」

「古いけれども、それが動かざる道理」

「それにしても、中山侍従殿には首尾よく目的のところへお落ちなされたかな」

「こころもとないことじゃ」

「十津川を脱<sup>ぬ</sup>けて、あの釈迦<sup>しや</sup>ヶ岳<sup>かたけ</sup>の裏手から間道<sup>かんどう</sup>を通り、吉野川の上流にあたる和田村というに泊<sup>と</sup>つたのが十九日の夜であつた」

「その通り」

「中山殿はじめ、松本奎堂、藤本鉄石、吉村寅太郎の領袖<sup>りようしゆう</sup>は、あれから宿駕籠<sup>しゆくかご</sup>で鷲家村<sup>わしや</sup>まで行つた、それから伊勢路へ走ると先触れを出しておいて、不意に浪花<sup>なになわ</sup>へ行く策略であつたがな」

「彦根の間者が早くもそれと嗅<sup>か</sup>ぎつけて、大軍でおつ取り囲んだ——吉村殿と、安積五郎殿<sup>あづみ</sup>が一手を指揮して後方の敵に向うている間に、藤本、松本の両総裁が前面の敵を斬り開いて、中山卿を守護してあの場を落ち延びたが、さて危ないことであつた」

「そこを落ち延びると、忽<sup>たちま</sup>ち紀州勢が現われて藤本殿はあわれ斬死<sup>きりじに</sup>じや。悼<sup>いた</sup>ましいことではあるが、その働きぶりは、さなが

ら鬼神のすがたであつた」

「その日の夕暮、またも行手に大敵が現われて、松本総裁は牧岡氏まきおかうじと池氏たぐとに後を托して、中山卿を守りて長州へ落ちよと申し含めて、自身は大敵の中で見事な切死きりじに」

「さてさて、天命是非もなし、我々こうして永らえているも、一いっに中山卿の安否が知りたいため」

「それも、どうやら望みが絶えたわい——」

このなかでは最も重い、組の監察をしていた酒井賢二郎が言い出でた一語は沈痛に響きました。それは絶望の叫びであつて同時に覚悟の決定を促すうながように聞えたから、一同は暫らく無言で酒井の面かおを見てみると、酒井は、

「それに比べては僭越せんえつであるが、建武けんむの昔、楠正成卿が刀折れ矢尽きて後、湊川みなとがわのほとりなる水車小舎に一族郎党と膝を交え



て、七生<sup>しちゆう</sup>までと忠義を誓われたその有様がどうやら、この場の風情<sup>ふうぜい</sup>と似ているではないか」

「いかにも……」

「もはや、いずこへ落ちたとて袋の鼠、飢え疲れて名もなき者の手にかかり、縄目の恥<sup>お</sup>などに遇<sup>あ</sup>うて、先輩や同志の名を汚すはこの上もなき不本意、ここらで落着いて、武士らしい最期<sup>さいき</sup>を遂げようではないか」

「尤<sup>もつと</sup>も……」

一同は更に異存がない、異存らしい面色もない。死すべきところ<sup>まさ</sup>に死ななければ、死せざるに勝<sup>まさ</sup>る恥があるということの分別はいずれも人後<sup>じんご</sup>に落ちないものであったから、彼等は死を争おうとも、それに異議を唱<sup>との</sup>うるものが一人もあるべきはずがない。一座が無言にして沈黙の重きに<sup>お</sup>圧されたのは潔<sup>いさぎよ</sup>き同意の表

白であつたから、言い出した酒井賢二郎も満足して、

「御同意で忝かたじけない。ただし、これは強しいては申さぬこと、なおまた万死を賭として中山殿の御跡おんあとをお慕い申してみたい者は、そのようになさるがよい、国に残る妻子眷族さいしけんぞくのことが気にかかるものあらば、それもまたお心任せ」

酒井賢二郎は一同を見渡して念を押すと、静まり返つた中から、

「いかにも酒井氏の申さるること、道理至極、死すべき時に死せざれば死するに勝まさる恥がある。今はとても中山殿のお跡を慕うこともなり難し、いわんやまた、いまさらに妻子眷族みれんに未練を残す者もあるまい、ここで腹を切るが最上の武士道と存ずる」

水野善之助というのがこう申し出でる。自然これが一同の意志を遺憾いかんなく代表したことになつた時に、

「拙者一人だけは——」

ヒヤリと剃刀で撫でたような言葉。それはさきほどから隅の方に黙々としていた机竜之助の声でしたから、一同の眼先は箭を合せたように竜之助の面に注ぐと、

「切腹は御免を蒙る——」

「何と言わしやる」

「拙者は、まだここで死にたくないから、一人でなりとも生き残つて落ちてみるつもりじゃ」

「死にたくない？」

浪士たちの眼から電が発するようですけれど、竜之助の眼は少しく冴えてゐるばかりで、その面は例の通り蒼白い。

「ふーん、死に怯れたな」

ほかの浪士は、憤激と軽蔑の眼を合せて竜之助を見る。

「拙者は死にたくない」

竜之助は冷やかなもの。

「忠義を忘れたか！」

忘れるにも、忘れないにも、竜之助には忠義の心などはないのです。前に申す通り、幕府を助けたいとか朝廷に尽すとかということは、少しも竜之助の胸には響かなかつたのです。今、どこへ行つても諸国の浪士が勤王佐幕勤王佐幕で騒いでいるのがばかばかしくてたまらないのであります。忠義のために腹を切る——楠正成が最期さいごに似たりと浪士らは血を沸かせている間に、竜之助ばかりはどうしてもそんな気分になれないものが見えます。

「机氏」

酒井賢二郎は逸はやる他の連中を抑え、

「貴殿一人は死にたくないと言われる、もとより強しいて死を求むるものではない、しからばこれより落ちるなり、逃げるなり、お心任せになさるがよい、さてその他の諸君」

酒井はまた一座を見廻して、

「申し遺のこすことなどもあらば、最後の思い出に書き給え」  
彼等は紙と矢立やたてを持つていました。

もはや、机竜之助の方は誰も相手にしなかった。竜之助が、こんなふうにつむじ曲りの人間であることは、この連中がもうよく吞込んでいるものと見えて、一旦は憤激してみたけれど、今は取合いませんでした。

竜之助は黙って、自分だけは遺書かきおきもしなければ辞世もつくらず、介錯かいしやくをしてやろうとも言わず、もとより頼もうと言う者もありませんでした。

そのうちに、余の十人は、それぞれ辞世の詩歌、妻子へ申し遺すことなどを書いてしまいました。

水野善之助は、二の腕の創きずをよく結び直しながら、

「宮の御鎧おんよろひに立つ所の矢七筋ななすぢ、御頬先二の御腕おんほほさき二箇所突かれ

させ給ひて、血の流ること滝の如し」

朗々と太平記を口ずさむ、それを荷田重吉が引受けて、

「然れども立ちたる矢をも抜き給はず、流るる血をも拭ひ

給はず、敷皮の上に立ちながら大盃おにさかづきを三度傾けさせ給へば、

木寺相模きでらさがみ、四尺三寸の太刀の鋒きつさきに敵の首をさし貫いて宮の御

前に畏りかしこま……」

木村清太郎は長い刀を抜いてそこへ跳り出おどでて、

「戈鋌くわえんけんげき劍戟けんげきを降らすこと電光の如くなり、盤石岩ばんじやくをとばすこ

と春の雨に相同じ、然りとはいへども天帝の身には近づかで、

修羅しゆらかれがために破らると……」

だいとうのみや

大塔宮の昔をしのぶにはちようどよい土地である。あの時分以来、この十津川郷には南朝忠臣の靈氣が残っているはずであります。

二

獵師の惣太は、薪たぎぎを取りに出るふりをしてこの小舎こやを逃げ出してしまいました。

十津川の岸へ出て一散いっさんに北へと走はせ下る。

「やれやれ怖こわろしいことじゃ、命拾いいをしたようなもの。しかしこうなってみると、怖こわいところにまた有難ありがたいことがある、あれを藤堂様なり紀州様なりに訴そ人をすれば、莫ばく大な御褒美ごほうびにあ

りつける、占め占め」

もう安心と思つた時分に、惣太は汗を拭きながら独言をひとりごと言いました。それでも足の方は休ませずに、なおも流れに沿うて急ぎ下ると忽ち行手たちまで人声がする。

「や、また来やがつたぞ、待てよ、敵か味方か、ここへひとつ隠れて様子を見てやれ」

岩と木立の間へ惣太は素早くすばや身をひそませると、流れを上つてこちらへ来るのは、都合十人ほどの武士であつて、その服装のいかめしいのを見ても落武者おちむしやでないことは確かです。

「宇津木氏、その机竜之助とやらは、日頃この天誅組の一味に氣脈を通じていたような形跡がありましたかな」

「いや左様なことはありません、聞けば江戸へ下る途中、伊賀の上野にて、これらの浪士の一行に加わり、それより吉野へ出



で、いったん浪花へ入つて、それからまた出直してこの旗上げに加わつたように見えまする」

一行の中の大将分と見えるのと話をしているのは宇津木兵馬でありました。

藤堂の討手うってで藤井新八郎というのがこの大将分で、兵馬はその手に加わつて、今この山奥深くたずね入り来つたのは、たしかに鷲家口から逃れた一隊の浪士の中に机竜之助がいると見定めたからであります。藤井新八郎は領うなずいて、

「この山中へ追い込めばもはや袋の鼠である、いずれへ行つても紀州領、帰れば我々の追手が十重とえはたえ二十重、山中に永く迷いおれば食糧はなし」

こういつたような話をしてこの一隊が、心して川の岸を進んで行つた時に、

「申し上げます、もしあなた様方は紀州様でございませうか、藤堂様でございませうか、申し上げます」

岩蔭から転がり出した獵師の惣太。一行は屹と足をとどめて、従卒は鉄砲の筒を向けてみましたが、用心するほどの者ではない、賤しげな木樵山がつの類がたった一人。

「その方は何者じや」

「獵師でございませう、惣太という獵師でございませうが、ただいま悪者を見つけましたから御注進申し上げます、ただいま、私共の山小舎へ都合十一人の浪人者が舞い込みましたのでございませう」

「ナニ、十一人の浪人？」

「ええ、ただいま、酒を呑み、肉を食って休んでおります」

「よく訴人した、案内せよ」

惣太を先に打立たせ、やがてその山小舎のあたりへ来た時分に、前後の様子を篤とくと見定めた藤井新八郎は、

「惣太」

「へえ」

「気の毒だが、その方の小舎へ火をつけてくれまいか」

「焼くのでございますか」

「そうじゃ、あとで不服のないように普請ふしんをして取らせる」

「よろしゅうございます、焼きましょう」

「しからば、これを持って行け」

新八郎は、腰にさげたやや重味のある袋を出して惣太に取らせる。

「これは何でございます」

「それは火薬である、その方はそれを持って、なにげなき体ていで

小舎へ帰れ、気取られぬように、小舎を締め切つて程よいところから火を出せ、その火を合図に我々が取囲んで、一人も残さず擲め取る」

「よろしゅうございます、やつてみましょう、ずいぶんあぶない仕事ですが、なあに、やつてやれないことはござんすまい」  
落武者は十一人と数が知れても、それが死物狂いに荒れる時は危険の程度が測られない、新八郎が惣太に火薬を授けたのは、その辺の遠慮から出た計画と見える。

藤堂方の討手は小舎を遠巻きにしていると、惣太は心得て、火薬袋を腰にぶらさげて小舎へ戻つて来たが、このとき、小舎の中はもう薄暗い。

「皆様方、帰つて参りました」  
戸をあけて中へ入ると、

「おお、猟師、どこへ行っていた」

「はい、米が切れたから里へ取りに参りました」

浪士らは、深くも惣太を怪しまぬようでした。惣太はおそろおそろる炉の傍へ寄つて、

「今、米を炊たいて上げましょうぞ、なんしろ鍋が二つしかございませんから、こいつを洗つて、これでお米を炊くと致しましよ  
う」

いま猪の肉を煮ていた鍋を惣太は取り下ろして、提げ出そうとする途端に、腰に下げていた、さつき新八郎から授けられた火薬袋の紐が解けて火薬はドサリとそこへ落ちました。

「猟師、何か落ちたぞ」

「へえ……」

惣太の唇の色が変わってしまいます、鍋を持った手がワナワナ

と顛ふるえます。

「これはその……」

鍋を下に置いて、あわててそれを拾い取ろうとする挙動があまりに仰山きやうざんなので、荷田重吉が不審に堪えず、

「それは何だ」

「これは——ゴウヤクでございます」

「ゴウヤクとは何だ」

「何でもございません」

拾い取ろうとする惣太の手首を荷田が押えて、

「ちよつと見せてくれ」

「ええ……御冗談ごじやうだん」

「貴様、まだ何か隠しているな、ゴウヤクとは何だ、出して見せろ」

荷田も、これが火薬袋とは知らないが、惣太の挙動があまり仰山なので、ついついそれを取ってみる気になると、惣太は面かおの色を失つて荷田の手を押し払つて、それを拾い取つて懐中へ捻ねじ込もうとしますから、いよいよ嫌疑けんぎが深くなるわけです。

「こりや猟師、貴様はただいまどこへ行つた」

「里へ米を買いに」

「黙れ、この近いところに米を売るようなところはあるまい、貴様は訴人そにんに出かけたな、我々の所在ありかを敵の討手へ知らせに行つたのであろう」

「ど、どう致しまして」

「その袋が、いよいよ以て怪しい」

荷田は力を極めて袋きわを引つたくる、惣太は力任せにそれをやるまじとする、その途端とたんにころがり出したのが炭団たどんほどな火薬

二個。

「やあ、これは火薬じゃ」

「おのれ！」

一人の浪士は抜打ちに惣太を斬ろうとする。惣太は絶体絶命で、眼の前に転がって来た火薬を一つ掴むや否や、燃え立っていた炉の中へスポットと抛り込みました。

轟然たる爆発。鍋は飛び、炉は碎け、山小屋は寸裂する、一人のうち、二人即死。面を半分焼け焦されたの、手の肉をもぎ取られたの、全身に大火傷をしたの。肉が飛び血が流れ、唸き苦しんで這い廻る上に火がメラメラと燃え上りました。

「ソレ合図だ」

遠巻きにしていた藤堂の討手は、意外に早く火があがったのを怪しみながら走せつける。



この場で即死した二人のほか、焼け爛ただれて歩行の自由を失い、藤堂の手で搦からめられたものが一人、あり合あう俵こもや菰こもを引つかぶつて逃げ出し、折からの闇まぎに紛まぎれて行方知れずになつたものが七人。

しかし、このうち六人はその翌日あくるひ、紀州方面へ逃げて行くところを、紀州勢の見廻りに出會つて山の中でつかまつてしまひました。

十一人のうち、十人まではこんなことで運命が定まつたに拘かかわらず、どうなつたかわからないのがたつた一人、それがすなわち机竜之助でありました。

紀伊の国、竜神村の温泉場で今宵は烈しく犬が吠えます。

山村とは言いながら、客には慣れたはずのこの里で、こんな  
に犬の吠えるのは珍らしいことです。

時はもう秋に入るのであるから、爽かなるはずであるべき天  
候が、まだなんとなく雲を持つて、桶の底のようなこの土地を、  
ひたひたと上から押ししてくるようなので、湯の客人もなんだか、  
近いうちに暴風雨でもなければよいがと言っていました。

犬も、それを心配して空に向つて徒らに吠えているのかとも  
思われます。

「犬が吠えてますなあ」

「そうでございます、よく吠えますなあ」

上方の客と見える頭の禿げた隠居と、和歌山あたりの商人と  
見えるのと、二人で湯槽の中で話していました。

竜神村は、日高川の源、山と山との間、東西二里、南北五里がほどに二三十町ずつを隔てて、八カ所に家がある。その八カ所のうちのここは湯本といつて、温泉宿が今では十九軒もある。その十九軒のうちむろまちやの室町屋というのが、この家でありました。

もう少したつと客がドツと多くなるが、今のところは、夏と秋との移り変りであるのと、近国に戦乱があるのと、そんなことなであまり客はないのです。

「まだ吠えてますなあ」

「あちらでも、こちらでも、吠え立ておるわい、どうしたものじゃろう」

二人の客は湯槽から這い上つて、隠居の方は軽石で踵かかとをこすりながら、

「何か、悪い獣が山から出てうせはせんかな、狼か、山犬か、猪しし

かむじな、なか」

「近頃は、トンと左様な噂うわさも聞きませぬ。なんにしても、こう吠えられては物騒ぶつそうでなりませんな」

二人が犬の吠えるのを頻しきりに気にしていると、浴室の戸をガタと開いて、一人の女中が面かおを出し、

「もし、お客様、恐れ入りますが、急にお湯をお上りなすつてくださいませ、あの、お調べのお役人が参りましたから」

「ナニ、お調べのお役人が——」

二人は面を見合せて、

「わしらは、別に調べられるような筋はごわせんが……」

湯から上つて、もう寝ようとする今時分に事改めて、調べの役人が向うなどとは、今までに例のないことで気味の悪い話です。二人は面を見合せて、

「何でござすな、いつたいお調べというは」

「はい、あの十津川筋とやらから、こちらへ悪者が落ちて参りましたそうで、それがため夜中やちゆうのお調べでございます」

「ああ、天誅組おちうどの落人か」

犬の遠吠えもそれでわかつた。

この晩、調べに来た役人というのは仰々ぎやうぎやうしいものであります。いずれも物の具に身を固めた兵士つわもので、十津川から来たものと、紀州家の兵とが一緒になつて、竜神村へ逃げ込んだ天誅組よるいの余類を探そうというのであります。

それがために、温泉宿とお客とは大迷惑で、入浴中を引き出されたり寝込みを叩き起されたり——それが引取つてしまうと、大風の吹いたあとのように、胸なを撫なで卸おろしながら床について、

やがて、犬の吠えるのも静まり返った時分のことでありました。室町屋の帳場で帳合ちやうあいをしていたこの家の若い女房——まだ眉を落さないが、よく見れば、それは、二月ほど前に、初瀬河原から藍玉屋の金蔵につれられて逃げたお豊であることは意外のようで、実は意外でも何でもありません。してみれば、ここはいつぞや金蔵が話した通り、その親たちがはじめた温泉宿である。金蔵は今も見えないし、役人の来た時も出て来なかつたから、たぶん不在ゐずなのであります。

お豊がこうして帳場へ納まつているからには、もう相場がきまつたものと見てよろしい——お豊は帳合をしてしまうと、行燈あんどんの火影ほかげに疲れた眼をやつて、ホツと息をつきました。さすがにまた帳場のわきへ置いた人相書に眼がつかます。さきの役人が置いて行つた人相書——もし、これに似た客が来たら遠慮なく

申し出でろ、人違いで咎めはないが、届けを怠ると重い罪だと厳きびしく申し渡されたものであります。ざつと見て捨てておいたのを、仕事が進んで、また取り上げて、はじめから読んでみます。

「年齢三十三四——

瘦形やせがたの方、身の丈尋常たけ、

顔色蒼白く、

鼻筋通り、

眼は長く切れて……白き光あり……」

お豊はハツとしたのでありましたが、

「甲源一刀流の達人——」

「あ！」

人相書を持った手が顫ふるえたようでしたが、さきに飛ばして読

んだ名前のところへ、ひたと眼が舞いもどる。

「元新撰組——机竜之助」

机竜之助……これでよかった。違う。しかし気にかかるは竜という文字……お豊の胸には急に熱鉄が流れるのでありました。

また犬が吠えて、この家の前で足音が止まる。

いま締めたばかりの表の戸をトントンと叩いて、

「もしもし、室町屋さん」

「はい」

お豊は返事をする。

「済みません、夜更けになって」

殿貝とのが貝いというこの温泉村の世話役の声でありますから、

「ただいまあけますから」

あいにく誰もいなかったから、お豊が立って戸をあけると、



殿貝老人ちようちんが提灯をつけて入つて来て、

「今晚は、どうもはや、度々お騒がせ申してお気の毒だが、お内儀かみさん、このお方のお宿をひとつ」

後ろを顧みて老人は、

「十津川からお越しのお武家様でござります」

お豊は愛想あいそよく、

「はい、よろしゅうございますとも、どうぞこれへ」

「さあ、お武家様、どうぞこれへお入り下さいまして」

老人が丁寧ていねいに案内すると、

「御免」

と言つて入つて来たのは、太刀を横たえ、陣羽織をつけた厳いかめしい身ごしらえですけれども、歳はまだよほど若いように見えます。

「あの、これは藤堂様の御家中でな、どうか御粗相のないように」

「見苦しいところでございました、それにこんな山家のことでございますから行届き兼ねまするが、どうぞごゆつくりお泊りを願いまする……お鶴や、お鶴さん」

お豊は入つて来た武士のために敷物を取つてすすめながら、女中を呼び、

「お洗足すすぎを差上げ申して、それからあの、お食事を」

「いや、食事はもう済みました、湯に入れてもらい、直ぐに休むと致しましょう」

若い武士は上り端あがはなに腰かけて草鞋わらじの紐を解く。

「お内儀さん、金蔵どのはまだ帰らぬかな、えらい永逗留ながとまりゆうじゃ」

「まだ二三日は、帰るまいと思われまますのでございます」

「そうか。なにしろ近国では、あのような騒ぎ故、早く帰つてくれないと困る」

「左様でございます」

「では、お頼み申しましたよ。それから、あのな、御如才ごじよかいもあるまいが、先刻さつきの人相書、あれはよくよく気をつけてな、何の遠慮はいらぬから、怪しいのが見えたら、早速、わしがところなり組合の衆なりへ申し出てもらいたい……いや、こちらのこのお武家様に直接じかに申し上げててもよろしい、頼みましたぞよ」

「ええもう、委細承知致しました」

この時、若い侍は草鞋を解き足を洗い終る。

「さあ、どうぞ、これへ」

お豊は、さきに立って案内する時、いままでは蔭であつた行燈の光でよく見れば、まだ前髪立ちの少年で、これは申すまで

もなく宇津木兵馬でありますけれど、お豊は、まだこの人には近づきがなかつたのであります。

四

温泉寺の鐘が九ツを打つ。

兵馬は、いま枕について、まず頭にうつるものは、いま自分を案内してくれたこの宿屋の若い女房のことでありました。思いなしか、自分がいったん姉と慕つたお浜の面ざしおもにそっくりです。お浜は憎むべき女である。兄の身にとっては、竜之助よりはお浜の方がいつそう罪が重いかも知れぬ——竜之助を憎む兵馬には、お浜はなお悪いものでなければならぬはずですから、兵馬にはそれが心から憎くなれないのです。故郷へ帰つた

時は、よく世話をしてくれて、江戸にいる時は着物を送つてくれたり、土地のみやげを送つてくれたり、よく修行してえらい人になつてくれと励ましてくれたこともある。芝の松原で、惨たらしい殺され方を見た時、その遺書を繰返して見た時、不貞の女の当然の報いを眼前に見せられても、なおその女が憎いとは兵馬には思えないで、やつぱり親切な姉の氣持が離れないのであります。

兄の無念を思いやつて、齒を咬み鳴らす時も、嫂の面影は、やつぱり優しい人にうつる。竜之助を憎み悪む心が火のように燃えても、お浜を慕わしく哀れに思う心は消えないのです。

兵馬は純良な少年である——まだ世の塵にけがれない真白い頭へうつった優しい人の影は、消して消せない、あんな氣立てのよい姉上が、なんと心が狂つて、竜之助のような奴に欺され

たことだ。

取返しがつかない、悔やんでも及ばない。兵馬は、これが浅ましくてたまらないのです。憎い者の罪は憎めるけれど、憎めない者の犯した罪はどう憎んでよいかわからぬ。兵馬は常にお浜のために、その罪を憎まんとしてかえつてその人のために泣きたくなるのです。

兵馬には、女の心の浅ましさがわからない。けれども要するに、自分の身の廻りの言わん方なき苦しきぶんらん紛紜は、一いつにお浜の心から来ていると、思えば思えるのである。人の一念こそ真に怖るべし、ちよつとした心の狂いは、無限に糸を引いて、それからそれとからみつくものである、その人が亡くなつたとて、その一念の糸はなくなるものでない。

今、自分の枕元へ丸い行燈を据すえて、燈心を程よく搔かきなし

て行つてくれたこの宿の若い女房の姿を思い浮べると、胸から乳へかけて真白な肌に血のかたまりが！

そんなものがあるわけではないが、兵馬は、あの芝の松原の、お浜の酷い殺され方を思いやつて身の毛が竦つのでありました。

竜神村の夜は静かで、犬も煩惱を忘れて眠るのに、兵馬は思いに募ることばかり。

お豊は兵馬を二階の座敷へ案内して、廊下を渡つて来ました。が、かの人相書のことかどうも気になつてならぬ。

帰りがけに、梯子わきの戸締りがほんとうでないから、ちよつと手をかけてみたが容易くは動かないので、一旦あけ直して見ると、眼の下は、夜に眠る温泉村。

夜更けての温泉村の風景は、土地に住み慣れた人をさえうつ、とりさせる。今は草木も眠る丑三時、竜神八所に立籠めた水蒸

気はうすものの精が迷うているようであります。

なんの気もなく空を見れば、ほこさきたけ 鉾尖ヶ岳としらまたけ 白馬ヶ岳との間に、

やや赤味を帯びた雲が一流れ、切れてはつづぎ、つづいては切れて、ほかの大空はいつぱいにきんすなご 金砂子をま 蒔いた星の夜でありました。

東から西に流れる雲、或いは西から東へ流れる雲。それが細長くつづきさえすれば、赤であつても、白であつても、ほかのどんな色でも、色合いにはかまわず、土地の人は一体にそれを「清姫の帯」きよひめと呼びます。

いま、お豊が見たのも、その「清姫の帯」であつて、むろごおり 牟婁郡から来て有田郡ありたごおりの方へ流れているのであります。

お豊は、この土地へ来て、「清姫の帯」を見るのはこれがはじめてですから、ただ、まあ珍らしく細長い雲と思つたばかりで



すけれども、もしこの土地に永く住み慣れた人ならば、面かおの色を変えて、戸を立て切り、明あす朝とも言わずに竜神の社へ駆けつけて、祈きと禱うと護ご摩まとを頼むに相違ないのであります。

ことに、東、鉾尖ヶ岳から、西、白馬ヶ岳までつづく「清姫の帯」は、土地の人にいちばん怖れられています。

三年に一度あるか、五年に一度あるか、とにかく、「清姫の帯」が現われることはあつても、この二つの山までつづくということとは滅めつた多たになく、もしそれがあつた日には、土地の人は総出で竜神の社へ集まり、お祓はらいをし、物忌ものいみをし、重い謹慎きんをしておそ畏れる。最初にそれを見つけた人は、その歳のうちに生いのち命にかかわる災難があるのだということでありました。

今、土地の人はみんな眠っている。おそろくこれを見たのは、お豊一人であろう——お豊の、そんな言い伝えを知らないこと

は、この村の今夜のためには平和である。しかし実際は、同じ夜の同じ時に、この怪しい雲を見た者が、この竜神村においてお豊のほかにも、まだ一人あるにはあつたのであります。

その晩、お豊のほかにも「清姫の帯」を見たものというのは、ほかではない、この竜神の社に籠る修験者しゅげんじやでありました。

この修験者は、三年ほど前から、ここへ来ていました。それがお豊と同じ時刻に水を浴びて、護摩壇ごまだんへ戻る時に、ちようと、この「清姫の帯」を見たのであります。

竜神の社があるところは、お豊のいる温泉場よりずっと高い——修験者は雲の起るところから終るところを仔細しさいにながめて、その雲がいずれへ流れていずれで消えるかをまでよく見ておいて、それから眼の下に群がる竜神の温泉場を見下ろしたのであ

ります。

日高川の源が社の下を廻うねつて流れて、村の谷間たにあいをかくれて行く。小半時こはんときも村の方を見下ろしていたが、村では別に誰も騒ぐものがない。それで、修験者は扉をあけて社の中へ入つてしまします。お豊は、もうずっと前に戸を締めてしまいました。

修験者が扉をあけて社の中へ身を隠してしまつた時分には「清姫の帯」は全く消えて、わずかに切れぎれになつた笠ほどのが三つばかり、白馬ヶ岳の上あたりに漂ただようのみでした。

仮りにこの「清姫の帯」を、お豊でないほかの村の人が見たことならば、それこそ大騒ぎで、さきの修験者が小半時も村の方を見下ろしていた時分に、ほとんど総出で、この社へつめかけて来ねばならぬはずのところを、今まで来ないくらいだから、誰も見た者はないにきまつています。

そうすれば、誰も知らない間に、怖ろしい災禍わざわいがこの竜神村を襲うて来るに違いない。その災禍の来ない前に、その災禍を鎮しずめる力のあるように信ぜられているのは、この竜神の社の修験者であります。

修験者は、村の人に頼まれるれば、村の人のためにあらたかな修法しゅほうをして、風か雨か、火か水か、とにかく、来るきたべき災禍を鎮めてやるに違いないのだけれど、困ったことには、いくら修験者にその力があつても、それを最初に見た村の人から頼みに来なければその法のききめがないということでありました。

さあ、伝説が真実であつたら、この村の頭の上に大悪魔が手を出しているわけであります。それを知っているのは修験者一人、知って知らないのはお豊一人——修験者は天地が八つ裂きになろうとも自分からこうとは言い出さぬ。いまや竜神村の安

否はお豊の口一つにかかつているはずなのに、そのお豊は怖ろしい言い伝えの前には無智であるだけに、それだけに大胆でありました。「清姫の帯」は念頭になく、ただ人相書が気になつて眠れないのであります。

五

その次の日の宵の口、室町屋の店先には、竜神街道や蟻腰越ありこしごえをする馬子まご駕丁かごかきと、それに村の人などが、二三人集まつて声高く話をしていきます。

「今年も、よくよく御難ごなんな年だ、十津川騒動さえ始まらなければ、こんなことはないのだが、湯の客は少ないし、薬種やくしゆを買いに来る商人も見えず、その上に、今日も明日も厳きびしい落人詮議おちうどせんぎ

で追い廻される、たまつたことじゃないわ」

全くその通りで、十津川騒動の余波を受けた竜神温泉の不景気たらない。

温泉のほかにも、この土地では薬種が採れる、瓜うりの根から粉がとれる、名物の檜笠ひのきがさと白箸しろはしとは土地の有力なる物産である、それから山で茸類たけるいがとれる——温泉とこれらの産物によつて土地の人は活計を立てているのであります。戦乱のために湯の客が少なくなつても、直ちに生活にさしひびくというようなことはないが、弱らされるのは天誅組の余類が、この竜神村のどこかに隠れているという嫌疑けんぎで、昨夜から引続いて、探索のあることでもあります。

世話役は引っぱり出され、人足は駆り出され、宿屋宿屋には厳しいお触れがある——馬子や駕丁もうつかり客を載せられぬ。

「ねえ、お内儀さん、こちらにおいでなさる、藤堂様の御家中だとかおつしやるお若いお方は、まだお帰りになりますまいね」  
これは檜笠ひのきがさづく作りの六助で、店にいたお豊を見て問いかけたのであります。

「ええ、朝早くおでかけになつたきり……」

「殿貝の旦那から聞くと、こちらへお泊りになつた若いお侍は、あれは敵かたきをさがしにおいでなすつたんだとき」

「敵を？」

「そうですよ、親の仇かたきが天誅組から逃げて、たしかにこの竜神村へ入り込んだといつて探しにおいでなすつたんだとき」

「はあ、親の敵、なるほど。まだお若いえらに豪いものじゃな」

「豪いものじゃ。早く見つけ出して、立派に討たせて上げたいものじゃな」

「なるほど、十津川からこの竜神へは、落ちて来そうなところじゃ。しかし竜神といつても、人家はこれ僅かなものにしてからが、あの山、この谷をさがすとしたら容易なものじゃあるまい」

「まあ、当分は御用心のことじゃ。落人じゃとて一人に限ったものでもあるまい、どこにどんな人が幾人かくれていることか、なんにしても今年は災難な年じゃ」

「でもまあ、よく『清姫の帯』がお出ましにならないことよ」  
「左様さ、これで清姫様の帯でもお出ましになったら、それこそ竜神村の世の終りだ」

「左様でござんすなあ、清姫様の帯も、もうここ五年がところもお出ましにならぬが、なにぶんにも、このまままで無事に済んで下さればなあ」



「いや、もう大丈夫ですよ、清姫様の帯が出るのは、おおかた夏にきまつてますからな、もう早や秋の分だから心配はない」

「そうでがすなあ」

しきりに「清姫の帯」、「清姫の帯」という。それが帳場にしたお豊の耳へは妙にひつかかつて、今までの無駄話のように聞き捨てておけない気持になりました。

「あの、皆さん」

お豊は帳場の方から言葉をかけて、

「何でございます、その清姫様の帯と申しますのは」

集まつていた無駄話の連中は、一斉にお豊の方を向いて、

「清姫様の帯とは何だとお聞きなさる……なるほど、お前様はこの土地ツ子では無え」

六助はいま更あらためて、お豊が他国人、ついこのごろ来た人であ

るかのように合点<sup>がてん</sup>して、

「それでこそ、そうお聞きなさるも無理はない。清姫様というのはね、それ、能狂言にある道成寺<sup>どうじょうじ</sup>……安珍清姫<sup>あんちんきよひめ</sup>というあの清姫さまでございますよ」

「ああ、そうでございますか」

その清姫ならば、どんな他国者でも大抵<sup>たいてい</sup>は知っている、それはずっと昔のこと。その帯がどうしたとか、こうしたとか、それがわからないことです。

「その清姫様の帯が、どうしたのでございます」

六助は話し好きです。今日は人足に駆り立てられて半日をつぶし、エエあとの半日もつぶしてしまえと、ここで無駄話をしているくらいですから、お豊から因縁<sup>いんねん</sup>を問われてみれば渡りに舟で、

「それは、こういうわけなんでございますよ」

六助は煙管きせるの皿を掃除にかかった。

「ようございますか、お内儀かみさん……お前まへさんは江州じゅうしゅう生れとかおつしやったな。江州女のことは存じませんが、この紀州きしゅうの女というものは、なかなかその、執念しゅうねんの強いものでござりますよ」

「まあ、それは怖こわいこととでござります」

六助が、あまり力を入れて話すので、お豊は少し笑いかけると、

「いや、笑い事じゃござんせん、全く以て昔から今まで紀州の女は、執念しつねん深いで評判へいばんじゃ、いったん思い込むと、それ鬼おにになつた、蛇じゃになつた」

六助は額ひたいのところへ指を出して、蛇へびになつた恰好かっこうをして見せますから、なおおかしいので、お豊は、

「ホホ、それでは紀州の娘さんは、お女房かみさんには持てませんね」

「それは男の出様次第さ、なんでもかでも蛇になるといいうわけではございませんよ」

「そうでしょうとも、そういちいち鬼になったり蛇になったりされてはたまりませんね」

「そうとも、そうとも、みんな男の出様次第なんだよ。つまり、そのくらい執念が強いものだから、可愛がられると、また無茶苦茶に可愛がられる」

「それも危のうございますね」

「ナニ、この危ない方は、ずいぶん危なくなってもよろしいのでございます」

「ハハ、わしらもそんな危ない目に遭つてみたい」

聞いていたものは一度に笑い出したが、六助だけは大まじめ、笑つちやいけない、大事のことだ、つまり男の出様一つで、鬼にもなれば蛇にもなる」

六助の話しぶりで一座に花が咲いたので、六助も得意です。

「お内儀さん、お前さんの前だが、女というものは受身で、男と比べたら一枚も二枚も割が悪い」

「さようでございます」

「女に欺だまされる野郎が多いか、女を欺す男が多いか、そこところはよくわかりませんがね、なんにしても、欺される野郎は間抜けで欺す男は罪だ」

本問題の帯の説明はどこへか飛んで、六助の序論はなかなか大したものです。

「それが証拠にはね、女に欺された野郎は、どうにかこうにか

ウダツが上るがね、男に欺された女は、どうもまあ十人が九人まで浮む瀬がないね」

「なるほど」

「だから、おんねん怨念はどうしても女の方に残る、は化けて出たとか腫れて出たとかいうのは、大抵は女にきまつている」

「なるほど」

「清姫様などがそれだ。つまり清姫様が悪いのじゃない、男の方が悪いのだ。女にじつ実があるほど、男に実がないのだから、捨てられた女の一念が鬼になったり、蛇になったり、薄情な男にとりついたりた祟つたりする」

「やあ、わしらがうちでも、引つ搔いたり、噛みついたり、毎日、清姫様の祟りでとてもやりきれねえ」

夫婦喧嘩をすることにおいて有名なかごや駕丁の松が茶々を入れる、

一同がまたドツと笑い出す。それにもかかわらず六助は大まじめで、

「笑い事じゃない、わたしは実地に、女のおんりよう（おんりよう）というものを見たからそういうのだよ」

「お化けを見たのかい、女の」

「ああ、見たよ、女のお化けを眼（ま）のあたり見届けたことがある」

「どこで見たい、聞きたいね」

「わしが、和歌山の御城下のさる御大家（ごたいけ）に御奉公している時分のこと……」

お化けの話。浮（う）ついていた者が六助の面（かお）を見ると、嘘（うそ）ではない、ホントにお化けを見たような面をしているので、ちよつと茶化（ちや）しくいのである。

「その御大家に一人のお嬢様（お嬢様）がおりなすつた……それはそれ

は、よい御容貌ごきりょうぼうでな、すごいほどの美しさだ。そのお嬢様が、お年は十九の春……」

六助は、自分で凄すじいような身ぶりをして、せりふにくぎりをつけたが、まるきり芝居しばい気で話すのではない。

「紀三井寺きみいでらの入相いりあいの鐘がゴーンと鳴る時分に、和歌浦わかのうちの深みへ身を投げて死んでおしまいなすつた」

紀三井寺の入相の鐘の音ねというところに妙に節をつけて——つまり鳴物なりもの入りで話にまた相当の凄味すじみがついた。

お豊は六助の話を、あんまり身を入れては聞いていなかったが、この時、総身そうみに水をかけられるような気持になりました。聞いていたほかの連中も、なんだかこう、少しものすごくなくなってくる。

「六助さん、まあ、そんな怖い話はよして、今の帯の謂いれを聞



かして下さいな」

お豊は、言葉をはさんで、和歌山の大家の娘が入水じゆすいしたという怪談を打消そうとしたのでした。

「なるほど、ではそのお嬢様の幽霊話はあとにして、清姫様の帯いわの謂いれねん縁ねんから説き明かすことに致しましょう」

ようやく話は本問題に入るのである。

「まず——紀州牟婁郡真砂むろごおりまさごの里きよつぐに清次しょうじの庄司という方がおありなすつたと思召おぼしめせ」

「なるほど」

六助の物語に拍子ひょうしを入れるのは、例の駕丁かぢやの松であります。

「その庄司のお嬢様を清姫という——一説にはお嬢様ではない、まだ水々しい若い綺麗きれいな後家ごけさんであつたとも申します」

「お嬢様と後家さんでは少し違う」

「なにしろ、人皇第六十代醍醐天皇様の御世の出来事だから、人別のところに少しの狂いはあるかも知れないけれども、どつちにしても綺麗な女の方に間違いはない。さてここに、鞍馬寺くらまでらの山伏やまぶしで安珍あんちんというのがあつた」

「安珍——清姫」

「その安珍がまた、山伏のくせにばかに好い男なのだ、そうして熊野参詣さんけいの道すがら、清姫様のところで一夜の宿を借りたと思いなさい」

「それが間違いのもとだ」

「清姫様が、スツカリこの安珍殿に打込んでしまいなすつた。さあ、そこが紀州女の執念で、食いついたら放すことじゃない」

「やれやれ」

「ところが、その安珍殿というのが、この上なしの野暮やぼで、一向いっしょう

お感じがない、感じないわけでもあるまいが、そこは信心堅固の山伏だ、仏法の手前があるから逃げる、姫様は離れない、寝るから起きるまで、食付き通くいつしで離れない」

「それは大変だ」

「そこで、安珍殿も弱りきつて、ぜひなく、清姫様を諭さとして言うことには、わしはこれから熊野権現くまのごんげんへ行く身だから穢けがれてはならぬ、その代り帰りには、きつとお前の望みを叶かなえて上げるから、日数ひかずを数えて待つていて下さいと」

「なるほど」

「そうしておいて安珍殿は熊野へ参詣を済まし、その帰りには、この家の前を笠かおで面を隠して、素早くすばや通りぬけてしまった」

「泊ればよかつたに」

「清姫様は陰膳かげぜんを据すえて待ちに待ち焦こがれておいでなさるが、日限ひぎり

がたつても安珍殿の姿が見えない、気が気ではない、門前を通る熊野帰りの旅僧にたずねてみると、その人ならば、もう二日も前にここを通り過ぎたはずだと教えられて髪の毛がニューツと逆さに立った」

「うむ、うむ」

「角が二本……雪の膚はだえにはみるみる鱗うろこが生えて、丹花たんかの唇は耳まで裂けた」

「鬼になった、蛇になった」

「角が生えた、毛が生えた」

「そうして、この日高郡をめざして一散いっさんに安珍殿を追いかけたものだ」

「なるほど」

「それから安珍殿が、道成寺の大鐘の下へかくされる、追っかけ

て来た清姫様は、もうこの時は本当の蛇におなりなすった、鐘のまわりをキリキリと巻き上げて、尾でもつて鐘をたたくと、炎ほのおが燃え上る——寺の坊さんたちは頭をかかえて逃げ出したが、ほどへ程経て帰つて見ると、鐘はもとのままだが、蛇はいない、熱くて鐘の傍へは近寄れない——遠くから鐘を押し倒して見ると、安珍殿はいない、骨もない形もない、ただ灰がちつとばかり残つて……」

これで、安珍清姫様の物語のあらずじは一通りわかつたから、今度は帯である。

「六助さん、そしてその清姫様の帯というのが、まだどこかに残っているのですか」

「ああ、それぞれ、その清姫さまの帯というのは、それとは全く別の話だ。まあ、いま話したようなことは、能狂言を見たり

物の本でも見た人は大概知つてますがね、その清姫の帯というのはこの土地の人に限り、近頃おいでなすつたお前さんに、それがわからないのは無理はない」

お豊の聞こうとする本題は、ここまで来てやつと緒が解けた。「それはね、帯というたとて、金欄きんらんや緞子どんすでこしらえた帯ではない、天にある雲のことですよ」

「雲のこと……」

「それだけでは、まだわかりますまいね。なにしろ、それぐらの執念おんりようですから、この日高川の上、日高郡一帯には、まだ清姫様の怨霊おんりようが残っているのですね」

「怖いことでございます」

「その怨霊が雲になつて、この日高郡の空へ現われる、それ、あちらに見える鋒尖ほこさぎヶ岳たけから、こちらに遠く白馬しらまヶ岳たけまで、一筋

の雲がずーつと長く引いた時は大変だ、それが今いう、清姫様の帯だ」

「まあ、鉾尖ヶ岳から、白馬ヶ岳まで……」

「そうそう滅多にそんなことはないがね、五年に一度とか、十年目とかに、それが現われる」

「それが現われると、どうなるのでございます」

「それが現われたら、大変だ、この竜神村一帯に大災難が起る」

「それはホントでございますか」

「ホントにも嘘にも、昔からの言い伝えで、その時は、村中の御おほら祓びきとうい、御つつし祈祷、お慎みをするのだ」

「その雲は夜でも……」

「夜でも昼でも、それが現われたが最後じゃ……それをいちばん初めに見た者が、あの竜神様へお告げ申して、お祈りをする、

それを隠してでもいようものなら、その人には、きつと清姫様の怨霊がたたつて、生きながら蛇になる」

「そんなことがあるものでしょうか」

「あるかないか、昔からの言い伝えじゃ。お内儀かみさん、お前さんもこの土地に居着いきなさるものなら、よく覚えておおきなさい、鉾尖ヶ岳から白馬ヶ岳まで一筋の雲……」

六

竜神の社やしろの石段は、数えてみると九十八級あります。

幅が狭いだけに勾配こうばいが急に見える。別に女坂というのではないのですから、お豊はこの石段の上に立つて見上げていると、十日ほどの月影が杉の木の間を洩れて、木この下した閣やみでは虫が鳴く。



「おや、お豊ではないか」

「まあ、金蔵さん」

金蔵は旅の姿である、今どこからか帰つて来たばかりである。そうしてここへ通りかかったものであります。

「お前、一人でどこへ行くのじゃ」

「竜神さまへ参詣に参りました」

「なんと思つて、こんな夜分——まあ信心はどうでもよい、わしと一緒に帰ろう」

「はい……あの」

「お前を喜ばせようと思つて、これこの通り和歌山の御城下から、お土産みやげを買ひ込んで来たわい、さあ、早く一緒に帰りませう」

金蔵には恋女房である、この女一人を喜ばさんがためにはど

んなことでもする、土産をひろげて女の喜ぶ面かおを早く見たい。手をとって連れて帰ろうとするのにも無理はない。

「金蔵さん……」

「何だ」

「わたし、この竜神さまへ心願をかけましたから、どうぞ、参詣をさして下さい」

「心願をかけたと……何か願があるのかい、何か不足があるのかい」

「いいえ、そういうわけではありませんけれど、急に信心ごろが出ました」

「そうかい、せつかくの信心とを止めても悪かろう。それでは、わしも一緒に行こう、ついでだから、一緒にこの竜神さまへ上つて拜んで行きましょう」

金蔵は何でもお豊の言う通りです。

「けれども金蔵さん、神仏への信心は、ついででは罰が当りま  
す、わたし一人で参りますから」

「なるほど、ついでごの信心ごころはよくないかな。それでは、お  
前の拝むのを傍で見よう。さ、手をお出し、手を引いてこ  
の石段を上らせて上げよう」

金蔵は手をとって、お豊を引き上げてやろうとするのです。

「ようございますよ、わたしは一人で参詣をして参ります、人  
に助けてもらっては信心になりませぬ」

「それもそうだ。それでは、わたしはここで待っている。早く、  
いや、ゆっくりでもよい、お前の思い通り信心をしてくるがよ  
い、夜明けまででも、わたしはここで待っている」

金蔵は、はたのぼり旗幟を立てる大きな石の柱の下にうづくまつて、ふりわ振分

けの荷物を膝の上に取り下ろし、お豊の面をさも嬉しそうに見ています。

「そんなら、待っていて下さい、御参詣をして参ります」

お豊は石段をカタカタと踏んで竜神の社へのぼり行く。金蔵は我を忘れて見上げ見惚みとれていました。

竜神の社には八大竜王のうち、難陀竜王なんだりゆうおうが祀まつつてあります。

こんな山奥に竜神を祀まつることが、奇妙といえれば奇妙である——今を去ること幾百年の昔、この地に竜神いずみのかみ和泉守という豪族が住んでいた。その屋敷跡は、今もあるということであります。

竜神の姓はその人以前からあったものか、その人が来て、竜神の社の名によつてその姓をつけたものか、その辺はハッキリしません。ハッキリしないところに竜神の秘密がいろいろと附け加えられました。

八大竜王の八という数が、ちようどこの竜神村の字あざの数と同じことになる、そうして、この湯本ゆもとの竜王社には王の中の王たる難陀竜王を祀つてある、野垣内のがい、湯の野、大熊、殿垣内とのがい、小森、五百原いおはら、高水こうすいの七所に、あとの僧鉢羅竜王そうばちらりゆうおうまでが一つずつひそ潜んでいるということでありました。

天にもし清姫の帯が現われた時は、遠からずこの八つの竜王が、八所の谷から、悉ことごとく荒れ出あばして、雲を呼び雨を降らす——さればこそ竜神の社は、竜神村八所の鎮めしずの神で、そこに籠こもる修験者しゆげんじやに人間以上の力があり、一村の安否の鍵がそこに預けられてあるように信ぜられているのであります。

お豊は事実、清姫の帯を見た——聞いてみれば怖ろしいことである。どうやらその怖ろしいものを見たのは、自分一人だけであるらしい。

お豊が今ここへやつて来たのは、その修験者に向つて、自分の見たところを逐ちくいち一白状するつもりであることに疑いはないのです。

修験者のいる所は本社の右手の高い森の中で、そこまではまだ八町ほどある、そこへ行くまでに大師堂を左にと下れば御禊みそぎの滝があるのであります。

大した滝ではありません。幅が五寸に高さが一丈もあるか、それが岩の間から落ちて一泓おうの池となり、池のほとりには弁財天の小さな祠ほしらがあつて、そのわきの細いところから、こつそりと逃げて水は日高川へ落ちる。この池を御禊の池といつて、椎しいの木が二本、門柱でもあるかのように前に立つて、それに注連しめが張り渡してありました。護摩壇ごまだんへ懺悔ざんげに行くものは、きつとここの滝へ来て、まず水垢離みずごりをとるのが習わしでありました。

それでお豊は、すぐに修験者のいる護摩壇へは行かないで、その大師堂を左にと御禊の滝まで来かかったわけでありましよう。

月もあるにはある、夜も更けたわけではない。それでも、このところ、この道は決して気味のよいものではありませんでした——草叢でガサと音がする、木の間でバサと音がする。お豊は、もう一步も歩けないように足をとめたことが幾度、それも早や、滝壺に近いところまで来ていました。檜笠作りの六助の口占を引いて、よく聞いておいたこと——懺悔する前には、水垢離の必要がある、護摩壇へ行く前には、御禊の池をおとずれねばならぬ。

お豊は、その通りにここまで来てみると、もうかなり勇気が出て、注連を張った木に手をおいて、中をのぞぎ込んで四辺

を見廻してみました。

人に見られてはいけぬ、人に見せるべきものではない——しかし、そんな心配はてんで無用、ここへは決して人が来ないのである。

お豊は滝の傍へ進んで、かの水が日高川へ逃げて行く弁財天の小さな祠ほくらへ来て、その前で手を合せた。それから静かに自分の締めていた帯を解きかかる。クルクルと帯を解いたが、さて、それを置くべきところがない、草の葉も木の葉も、じめじめと水気がたつぷりで、地の上にも水が滲にじむ。お豊はちよつと当惑したが、すぐに気のついたのは、弁財天の祠の土台のところから根を張つて、ほとんど樹身の三分の二を水の方へさし出したひとつと一幹の柳でありました。その柳の、ちようど程よい枝ぶりのところへ帯をかけて……それから着物と襦袢じゅばんとを一度に……脱ぎ



かけると、お豊は自分の肌の半身が誰もいない闇の中で、あまりに白かったのに怖れたようでありました。思い切つて水に浸つて、いるうちに、不思議なもので、お豊は何とも知れない心強さを感じてくるのであります——この冷たい水の中に、尤もまだ秋のはじめで、水が苦になる時でないとはいへ、今までの怖ろしかった心が、だんだんに消えて行つて、水の肌に滲み込む気が何とも言えぬ清々しきさになつてゆくのであります。

頭の中で、ごつちやになつていた血の筋が、一すじずつに解けて、すんなりと下にさがつて来る、いつまでもこの水につかっていたい——こんな気持になるくらいですから、頭の上の木の梢で怪しげな鳥が啼こうとも、滝の水が横にしぶいて頭までかろうとも、とんと気のつかないくらいにまで心が鎮まつてゆきました。

こうして後、森の中の修験者へ行つて逐一ちくいちにその身の上を語る。雲のことを語る。そうすれば自分は生れ更かわつた身になれることのように思われてきました。

その時分、この滝壺へ、また左の方のきわめて細い道、この道を伝わつて行つても護摩壇へは行けるのであるが、これはここに籠る修験者のほか滅多めったに通わない細道から、こちらへ徐々そろそろと下りて来る者がありました。

びやくえ白衣を着ていることが闇でもよくわかるから、人間には相違ないが、暗い中を手さぐりで、ようようとこつちの方へ向いて来ます。

そうして、前の弁財天の傍かたわらの、ごく細い道のところまで辿たどつて来たのを、よく見ると、手には何やら杖をついて、面は六部ろくぶのような深い笠でかくし、着物は修験者が着る白衣の、それも

そんなに新しいものではないこともわかります。

この人は、やっと細道を辿つて来たのが、ここはやや平らになつたので、杖で行手をさぐりさぐり歩みはじめました。

お豊は、この時も一心ですから、少しもこの人に気がつきませんでした。

七

歩んで来た白衣の人は、しばらく、弁財天のほこら小祠の傍に棒のように突立っていました。

闇の中に白衣ですから、うすら鮮あざやかというほどによくわかります。

「あれ——」

ようやくに気のついたお豊は狼狽ろうばいしました。

「誰かいる——」

白衣の人は、ほとんど聞えぬくらいつぶやの小さな声で呟つぶやきました。してみると、今までお豊がここにいたことは気がつかなかったので、お豊が狼狽あわてて着物を取りかかろうとしたから、はじめて人のここにいることを感づいたらしいのです。

「誰かいる——」

と小首をかしげた上で、お豊の方に向き直つて眼をつけるかと思つと、そうでなく、白衣の人は、そのまま杖で地面を叩き、極めて徐しずかに大師堂の方へ小道を辿つて行きます。

お豊は、ホツという息をつき、大急ぎで引つかけた着物の襟えりを直してその人の後ろ影を見送るのでありましたが、やっぱり、これはこの山に住む修験者か山伏のなかの一人——自分が今た

ずねて行こうとする修験者のお弟子かも知れぬ、或いはその修験者かも知れぬ。只人<sup>ただひと</sup>ではない、里の人でないにきまつているけれど、それにしても困ったことであります。

「水垢離<sup>みずごり</sup>の現場を人に見られたら、その功力<sup>くりき</sup>が亡びる」

これは、やつぱり六助がそう言った。

そんなら、たとえ修験者であろうとも、山伏であろうとも、人の眼に触れてしまった上は、もうもう水垢離の信心はフイになつた——お豊は気が抜けたが、急に腹立たしさが込み上げて来ます。帯を結びながら、その白衣の男のあとを睨<sup>にら</sup>まえて齒<sup>は</sup>嚙<sup>が</sup>みをしたのでした。水につかつていた時の心強さも清<sup>すが</sup>々<sup>すが</sup>しさも無残に塗りつぶされた業<sup>ごう</sup>のつきない身体<sup>からだ</sup>。清浄に返る懺悔を妨げに來た天魔と、白衣の人を、お豊としては怖ろしいほどの形相<sup>ぎようそう</sup>で見つめていると、気のせいか、その笠から洩れる背丈<sup>せたく</sup>、恰好<sup>かつこう</sup>、

ことに肩つきや、身の聳え、たしかに覚えのある姿であります。この時、お豊の頭脳あたまのなかにきらめいたものは、ほかでもない人相書。あの人相書のことを忘れていたのは、いま水につかっていた間ぐらいのものです。

その、背丈、恰好、肩つきや、身の聳えを見て、俄然として醒さめ来きたったお豊の眼に展開さるるは机竜之助。いや、机竜之助の名は知らない、その変名の吉田竜太郎で、頭蓋あたまの上から踵かかとの下まで貫くほどに覚えている。

お豊は、二足三足、小走りにして、追いかけたくらいでしたが、

「もし——」

「ナニ……」

先へ行く白衣の人は、お豊に呼びかけられて、すつくと立つ

てしまいました。

「あの、あなた様は……」

お豊は、白衣の人の突いた杖にすがるほどに近寄って、下から笠の中をのぞき込むくらいに見ましたが、

「護摩壇ごまだんの修験者様ではござりませぬか」

吉田とも竜太郎ともたずねてみなかったのは、もう一ぺん、  
こえ 声音を聞いてみたかったからです。

「いや、修験者ではない」

もう充分である、修験者でなくてもよい、誰でなくても、その声の持主であればよいのである。

「それでは、あの吉田様……」

「吉田？」

かぶっていた笠がこころもち揺ゆらぎます。

「竜太郎様——」

「竜太郎？」

「あの三輪の植田丹後守様においでになつた——」

「三輪の植田丹後守？」

「間違いはござんすまい」

お豊は、その白衣の袂たもとに縫すがらんばかりに取付いたのでしたが、

白衣の人は動かず。

「違う、拙者は吉田竜太郎とやら、そんな人は知らぬ」

「まあ、知らぬとおっしゃいますか——」

疑うべからざるものを疑う、お豊は、しばし取付端とりつきばに迷いました。

「そなたは女子おなごのようじゃが、誰じゃ、どなたでござる」

「お忘れになりましたか、豊でございます。三輪の薬屋におり



ました……」

「豊……お豊……」

白衣の人の姿勢はこの時くずれた。

「うむ、その声に違いはないようじゃ、珍らしいところで会った」

「ああ、左様でござんしたか」

お豊は、その人にすがりつくように身をその足許あしもとに投げたのを、白衣の人、すなわち机竜之助は、徐しずかにその手で受けたが、二人が面かおを見合すべく、木この下闇したやみは暗いし、よし日と月がかがやき渡つても、竜之助はおそらく昔の眼でこの女を見ることはできまい。

「まあ、あなたは……」

お豊は何から言い出して、あの驚き、喜び、つづいて来る怖

れを表わそうかを知らないのであります。

竜之助は、よりかかるお豊の身を両手に受けたが、何を思つたか、遽にやかに振り放つようにして、

「危ない、このまま別れよう」

背を向けて、そうして杖で徐しずかに地を叩いて歩み出そうとします。

「どうぞ、お待ち下さい」

お豊は、あわててその袂とらを捉えて、

「なぜ、そのように情つれなくなさいます、あなた様のお身の上もお聞き申さねばならず、私の身の上もお話し申し上げねばなりません」

それでも竜之助は振返らない。

「いや、こうしているのはあぶない、拙者の身も、お豊どの、お

前の身も」

相変らず寒の水が石を走るような声です。けれども、その冷たい声が今以てお豊の腸はらわたに沁み込しむようです。

「それはよく存じております。あの、あなた様は十津川からこちらへお落ちなすったのでございましょう」

「うむ——」

「そうして、あの、あなた様のお名前は、吉田竜太郎さまではございますまい」

「……………」

「机竜之助様とおっしゃるのでございましょう」

「それが、どうして知れた」

「もう、人相書が廻っております」

「人相書が？」

「紀州のお役人や、藤堂様のお侍などが、毎日、あなた様をたずねておりまする」

「それ故、あぶないと申すのじゃ」

竜之助はまた杖を取り直します。

「まあ、待つて下さい」

お豊は竜之助の行手にふさがるようにして、

「それに、あの、あなた様を兄の仇じゃと申してねらつているお方がありまする」

「兄の仇？ そんなことは……」

なんと申つても動かない声で、ふつつりと言ひ切つて、行くうとする方へ歩み出すのを、お豊は、その杖を奪うようにして、

「竜之助様、あなたは、あの時のお約束をお忘れはなさりますまい、わたしをつれて、江戸へ落ちて下さるあのお約束をお忘

れはなさりますまい、あの時のお約束通り、江戸へつれて逃げていただきたいのでございます」

「江戸へ逃げたい？」

竜之助の面かおの表情は、笠でまるきり知れないけれども、その声は、キリキリと厚い氷を錐きりで揉み込むような鋭い嘲あざけりをも含んでいるのであります。

「わしと江戸へ逃げたい？ お豊どの、お前は亭主持ちのはずじゃ」

「ええ……」

お豊は竜之助の前へその事情を自白しようとするところでした。それをどうして竜之助が知っていたのか、先せんを打たれて驚き且かつ狼狽ろうたいしました。

「それは余儀ない事情でございます……」

「余儀ない事情？」

「あなたは、あなたには、わたしの心がわかりませぬ……」

「わからぬ」

「どうぞ、下にいて、ここへおかけなすつて、わたしの苦しい事情をお聞き下さいまし」

お豊は手近の岩の上を払つて、竜之助の手をとつてそこへ腰をかけさせて、

「竜之助様、おつしやる通り、わたしはいま亭主持ちでございます……この温泉宿の金蔵というのが、わたしの夫でございます……その金蔵というのは、西峠の原で、わたしたちに鉄砲を打ち掛けた悪者でございます、その悪者のために、わたしは自由にされているのでございます……口く惜やしゆうございます。それはみんな、伯父のためや、植田様のためでございます。わたし

が自由にならなければ、あの乱暴者は伯父様や植田様まで鑿殺みなごろしにし、三輪の町を焼き亡ぼすと言っているのをございます……竜之助様、どうぞ、人のために忍びきれない恥を忍んでいる私をかわいそうだと思つて下さいまし、一目、わたしを見てやつて下さい、わたしにも、あなたのお面かおを見せて下さいまし」

「見えない、見えない」

竜太郎は面をそむけて、

「拙者の眼は見えない」

「エエ！」

お豊は、それを真事まこととして聞かなかつたが、この時、

「お豊——お豊——」

遙かに呼ぶ声は、階段の下に待たしておいた金蔵の声であります。

宇津木兵馬もまた、この夜、宿を出て、ただひとりこの竜神の社内へ出て来たのであります。

今日で、この地に留まること三日、まだ机竜之助の在所がわからない。

十津川で山小舎やまごじやが爆発した後、中にいた十人の浪士の運命は悉くきまつたけれども、竜之助一人の行方だけがわかりませんでした。しかし、落ち行くところは必ずや紀州竜神——竜神は昔から落人おちうどの落ち行くによい所であります。

源三位頼政げんざんみよりまさの後裔こうえいもここに落ちて来た。熊野で入水じゆすいしたといたう平維盛たいらのこれもりもこの地へ落ちて来た。ずっと後の世になつても、乱



を避け世を逃れた人の言い伝えが土地の古老の話に聞くと幾つも残っているのです。

兵馬は十津川から追いかけて来る間、山中のそま 柚すももに聞くとこんなことを言いました——ある夜、一人の武士が、この山間やまあいの水流しきで頻りに眼を洗っていた。最初は水を飲んでいのかと思つて、よく見たら、幾度も幾度も眼を洗つていたのであつた。柚と聞いて安心し、竜神へ出る道をよくたずねて、おぼつか 覚束ない足どりで出かけて行つた……

たしかにそれ。そうしてどこかに負傷している。眼を洗つていた——かの火薬の烟に眼を吹かれたのもあろうかと、兵馬は直ちに想像しました。

兵馬はこれに力を得て、息もつかず竜神まで追いかけて、さまざまの人の手を借りて、今日まで三日さがしたけれども、更に

その行方が知れないのであります。

竜神八所を隈なく探すと、いうのは容易なことではないが——これより遠くへは落ちられないわけがあるから、兵馬は必ずや、この附近で竜之助を見出し得るものと思つています。

そうしてかの七兵衛は、お松をつれて近いうち、ここへ来るはずになつていました。

兵馬は、尋ねあぐんでもなお気を落さない。今宵も、この境内を抜けてみようとするのは気散じのためのみではありませんでした。

「お豊、おお、そこにいたか」

といつて、いま思案に耽りながら神社の境内を歩いて行く兵馬を、階段の方から呼びかけたものがありました。見れば、旅の風をした若い町人です。

「おや、これは違いました。はて、お豊はどこへ行つたらう」  
その旅の男は、兵馬を尋ねる人でないと知つて、手持無沙汰てもちぶさたにあちらへ摺すり抜けてしまします。

兵馬は、それに拘かかわらず、社内の奥をめざして行くこうとして、ちようどかの大師堂の方へ足をはこぶと、その細道から、意外にもまた一つの人影が出て来ました。それは女でありました。

「おや、宇津木様ではござりませぬか」

女の方から言葉をかけたので、

「おお、これは室町屋の御内儀ごないぎ」

その女はお豊でありました。

「どちらへお越こしてございます」

「いや、どこというあてもなく、この社内をぶらぶらと、あの奥の森の方まで行つてみようと思ひます」

兵馬が指したのは、護摩壇ごまだんのある修験者の籠る森のことであり  
ります。

お豊は、やはり森の方を見上げて、急に不安の色が面おもてにかか  
り、

「あの護摩壇へでございますか。あれは、あそこへは、おいで  
にならぬがよろしゅうございます」

「何故に？」

「あれは、この土地で、きつい信心をなさる修験者がおりまし  
て」

「修験者が？」

「はい、その修験者が、あれで護摩を焚たいておいでなさいます。  
それ故、あそこへはおいでにならぬがよろしゅうございます」

「修験者が護摩を焚たいているから行くなと言われるか」

「はい」

「修法しゅぼうの邪魔さえ致さねば、近寄つても苦しゅうはあるまいと思しう」

「いや、それがこの土地の習いで。強たつてあなた様があればお越しになりたいと思召おぼしめすなら、これから少し参りますと、御禊みそぎの滝というのがございます、その滝壺で水垢離みずごりをおとりになつて、その後でなければあれへ参れぬことになっております」

「水垢離をとつた上で？」

兵馬は小首を傾けて、

「それほどまでにして信心にも及ぶまい」

彼は、その護摩堂へ行くことを思い止つたものらしい。

お豊は挨拶をして、かの階段を下りて行きました。

兵馬は、またそぞろ歩きをはじめたが、ふと思ふよう、あの

女は、たった一人で何しに、この淋しいところへ来たものであろう——さいぜんの自分を呼びかけた旅の男は、お豊、お豊と、女の名を呼んでいた、或る種の女にはよくある迷信じみた信心から、ここへ夜詣りに来たものであろう。

兵馬はこんなことを考えて、社殿の前へ来ました。そこで社殿の背後を見上げるとかの護摩壇の森。そこへは、行つてはならない、行かないがよいと戒められてみると、どうも、それだけに不思議があるようだ。そうだ、自分が、この附近で、まだ足を踏み入れぬのはあの護摩壇の森——よしよし、なにほどのこともあるまい、上つてみよう。

兵馬は一文字に森をめがけて進んで行くのでした。無論、かの御禊の滝の水垢離などには頓着せず——

机竜之助が隠れているところこそ、その護摩壇のうしろでありました。

それを隠しておくのは、かの修験者であります。

「御浪人、眼はどうじゃ、眼は」

窓を隔てた次の間から、修験者は、この世の人でないような声で尋ねてみると、

「うむ、よくない、だんだん悪くなるようじゃ」

机竜之助は、ひじ 肱を枕に、破れた畳の上に身を横たえて、かたわら 傍には両刀を置いて、こう答えたが、燭台の光で見ると、例の蒼白かおい面がいつそう蒼白く、両眼は閉じて——左の眼のふちにはうつすらとあざ痣がある。

「それはいかん、滝の水で洗うて来たか」

修験者は言う。竜之助は答えて、

「さいぜん、滝まで下つて行つた、どうやら人がいるようだから、やめにして帰つて来た」

「ナニ、人がいた？ 滝に人がいたか」

「うむ、一人の女が滝を浴びていた」

「女が？ 滝を？」

修験者は言葉をきつて、何やら考えているようです。

「修験者殿、雨が降つて来たようじゃな」

「左様、雨じゃ」

「なんとなく、木の葉も騒ぐようだ、風も出て来たと見ゆるわ」

「おお、風も出て来た」

しばらく静かであつて、室外はポツリポツリと雨の音がする、



サーツと風の騒ぐ音もする。

「さて、修験者殿……」

竜之助は、やや改まつた声で、

「いつまでもこうして御厄介ごやつかいになつてはおられぬ、拙者は立退こうと思う」

「待て待て、その眼を充分なおに癒なおしてからにするがよいぞ」

「治なおるかよ、この眼が」

「治る、信心一つじゃ」

「うむ——」

竜之助は、また黙つた。

「しかし、その信心ができぬ。拙者にはこうなるが天罰じゃ、当然の罰で眼が見えなくなつたのじゃ、これは懟なまじい治さんがよかろうと思う」

竜之助は独言ひとりごとのように言う、修験者はこれについて返事が無い。竜之助が独言のように言った時は、修験者はもう護摩壇に上つていて、それを聞かなかつたものらしい。

「眼は心の窓じゃという、俺の面から窓をふさいで心を闇にする——いや、最初から俺の心は闇であつた」

竜之助の面には皮肉な微笑がある。窓の外の闇はいよいよ暗くして、雨は相変わらずポツリポツリ、風もザワザワと吹いている。

心の闇に迷い疲れた竜之助は、こうしたうちにも、うつらうつらと夢裡ゆめに入る。

ちようどこの時分は、金蔵とお豊も室町屋へ帰つていようし、宇津木兵馬は、お豊の言い分も肯きかず、このほとりへ上つて来たはずであるが、雨に恐れて引返したことであろうと思われる。

竜之助は肱ひじを枕に夢に入る――

「おお、何を泣いている、お前はどこの子じゃ」

いたいけな男の子、道の真中に立ち迷うて、さめざめと泣いているのを、竜之助は傍に寄つて、その頭を撫なでながら、

「泣くでない、お前はよい子じゃ」

竜之助の眼はハッキリとこの子供を見ることができると、自分ながら不思議に堪えないで、

「もう、日も暮れる。さ、わしが送つて行つて上げる、お前の家はどこじゃ」

「坊には家がない……」

子供はしやくり上げて言う。

「家がない？ では、お父さんはどこにいる、父親は……」

「知らない……」

子供はやつぱり面かおを上げないのです。

「知らない？ お母さんは、母親はどこにいる」

「知らない、知らない」

「はて、お前には、家もない、父も母もないのか」

竜之助は、この迷子まいごを、どのように扱あつかうてよいのか当惑して、空むなしく頭を撫なでながら、

「坊や、では、どうしてお前はここへ来た、誰につれられてここへ来た」

「知らない……」

「困こまったな、この夕暮に、この淋しみしいところへ子供をひとり捨すて置いて……よしよし、拙わし者が里さとまで連れて行って上げよう、さ、おじさんに抱かかかれてみる」

「いやだ、おじさんは怖い」

「怖い？ 怖いことはありはせぬ、さあ、このおじさんが里まで抱いて行つて上げる」

「いや！ 坊は、おじさんは嫌いじゃ」

「嫌い？ では誰がよいのじゃ」

「与八さんが好き。与八さんが来るまで坊は、ここに待っている」

「ナニ、与八さん？」

竜之助は、この声を聞いて身の毛がよだつようになります。

「坊や、お前の名は何というのだ……うむ、名前は忘れはすまい、言つてごらん」

「坊の名は郁太郎……」

「ナニ、郁太郎？」

竜之助は摺り寄つて、子供の面に当てた紅葉もみじのような手を振り払つてその面を覗のぞき込もうとすると、

「いや！ いや！」

子供は竜之助の手を振りもぎつて、あちらへ逃げて行きます。

「お待ち……坊や、お待ち……」

竜之助はそのあとを追いかけて、

「郁太郎……お前の父親はここにいて、」

て、  
竜之助は大きな声で呼びかけたが、郁太郎は小さな首を振つ

「嘘うそ！ 嘘！ 坊には、お父さんというものはない」

小さい足どりで一散にかける。

「与八さん——与八さん——」

どこかで返事があつて、

「おうい、郁坊やあい」

憐れむべし、この子、己れが実の親を厭うて、あらぬ人の名を慕うて呼ぶなり。

竜之助は立ち止まつて、はふり落つる涙を払った手を見ると、涙と思つたのは悉く血だ。

竜之助は立ち尽して、その子の駈け行く方を見ていると、ノツソリと闇の中から一人の肥え太った男が出て来た。

「おうい、郁坊やあい」

その声は田舎訛りの言葉であるけれども、なんとも言えぬ慈愛に富んでいる声でありました。それを聞きつけると子供はもう嬉しそくに飛びかかつて、

「与八さあん——」

父を知らず、母を知らずと言つた児は、父と母とを一緒にし

たよりも強い懐かしさでこの太った男に抱きついてしまいました。  
た。

「おお、郁坊、ここにいたかい、よくいてくれたなあ」

温かい手で、すぐ抱き取つて、頬ずりをして可愛がる。その面はかがやいて、後光がさして来るようです。泣いていた子供も晴々して、ふいとこちらを向きましたが、竜之助を見ると泣きそうな面をして、

「怖い人——あそこに怖い人がいる」

指して示すと、抱いていた肥った男は慈愛にかがやく面をこちらに向けて、

「怖い人ではないよ、坊やお父さんはあの人だよ」

「嘘だ！」

子供は、どうしても承知しません。



「嘘ではない、あの人は坊やお父さんだけれど、坊やはあの人の傍へは寄れないのだよ」

「でも、坊には、お父さんはないと言ったじゃないか」

「てておや父親のない子があるものか……坊やにも、お父さんもあれば、お母さんもあるだよ」

「お母さんもあるのかい……どこにいるんだい」

「それはなあ……」

「早く、そのお母さんのところへつれて行っておくれ」

「うむうむ、つれて行くとも」

抱き上げた子を、ゆすぶつて、与八と言われた男は、竜之助の方へ、そのなんとも言えない慈愛の面をかお向けて、あちらへ行ってしまおうとするから、

「与八——」

竜之助は、あわただしく呼びとめてみました。

「与八——待ってくれ」

足が動かない——

「与八——郁太郎」

声の限りに呼ぶと、二人の姿は見えずして、光明こうみょうの雲が、あたりいっぱいにかがやく。

「与八——郁太郎」

咽喉のどが裂けたと思われる時に、夢は覚めた——眠っていた時にありありと見えた人の面が、覚めては見えない。

「誰だ、そこへ来たのは何者だ！」

修験者の地を突き貫ぬくような叫び。竜之助は何事が起つたのかと思う——誰かこの夜中に、ここへ来たものがあるらしい。

雨も風も歇やみはしないのに。

十

「誰だい、誰だい——おお痛っ」

金蔵は、しばらく起き上れないで、腰のあたりをさすると、兵馬は丁寧かいほうに介抱して、

「お怪け我がはないか」

「いや、もう大丈夫。お前さんは……お豊ではなかつたね」  
起き上れないうちから、もうお豊のことです。

兵馬は傘かさを拾ってやると、金蔵は立ち上つて面をしかめ、  
「これはどうも——ナニ、もう大丈夫でございます」

お礼もろくろくに述べず、傘を受取つてまたも石段をめがけ

て上りはじめようとしたが、

「あの、もし、あなた様、この社やしらの中で女の姿をお見かけになりませんかでしたか」

「女の姿を？」

「はい、この室町屋の女房のお豊という女を」

「ああ、お豊どのならば」

「はい」

「さきほど、この石段を下へおりて行きました」

「石段を下へでございますか」

「いかにも」

「そんなら、行違いに家へ帰っておりますはせんか」

金蔵は上りかけた足を石段から引いて、

「それでは、帰ってみましょう」

もと来た方へ引返して大急ぎで駈けて行きます。

兵馬は、そのあわただしきに笑いを禁じ得なかつたが、そんなことは別に兵馬の気にかかることではない、気にかかるのはあの護摩壇のことだ——堂の傍へ近寄ると、中から修験者の声で、

「何者だ！」

と呼ばれたが、強しいて土地の人が神聖と立てる修法しゅほうを妨げるのもよくないと、帰つては来たが、なんとなくあの護摩壇に心が残るようだ。よし、改めて修験者に会つてみよう。

こう心をきめて室町屋まで帰つて来ると、家は思ひのほかヒツソリしていました。雨が降っているから、障子を立て通しにしてあつたのをあけて入ると、帳場のわきに金蔵かねぞうが苦にり切つて坐つている、その傍には番頭がピリピリして跪かまつている。

「お帰りなさいまし」

と言つたが張合いのない声でした。苦り切つた金蔵と兵馬とは、ふと面を見合せると、兵馬は、いま石段から転げ落ちた人が、どうやらこの人らしいと思つたが、そのままにして、自分は己れの部屋へ入つてしまいます。

床を展のべに来た女中に聞いてみると、お内儀かみさんが、さつき出たまま、まだ帰らないので、旦那様が焦じれて怒つているのだと言いました。そんなことは兵馬が聞いたつて別に心配することではありませんでした。

兵馬が二階へ上つた時分、金蔵の眼が一層険けわしくなつて、天井を睨にらみつけたようでしたが、

「喜六、今のはありや、うちのお客か」

「へえ、左様でございます」

「いつごろから来た」

「旦那様が、和歌山へお出かけになつて間もなく」

「そうか……」

金蔵は番頭からこれだけ聞いて、また兵馬の通つて行つたあとを睨みつけて、

「一人か」

「へえ、お一人でございます」

「侍のようだな」

「左様でございます、十津川騒ぎからこちらへお越しになりました、藤堂様の組だそうでございます」

「何しに来たのだ」

「兄様の仇をにいさまたずねておいでだかたきそうでございます」

「兄の仇？」

金蔵は、また苦り切つて押黙おしだまつたが、

「聞いて来い、今のあの若侍に聞いて来い」

突然、猛たけるような大きな声でこう言い出したので、番頭は、

「何でございます、何をお聞き申すのでございます」

「あの若侍が知っている、お豊の行きどころを知っている」

「あの方がございますか。あの方がお内儀さんの……」

「知っている、聞いて来い」

金蔵は、怒鳴どなりつけて番頭を立たせました。

番頭は、何のことだか一向わからないけれど、まあ言われる通りに聞いてみよう、と、怖る怖る兵馬の部屋をさして出かけて行きます。

「そうだ、それに違いない——」

金蔵は、ひとりで齒齧はみみをしています。



「前髪立ちの若衆わかしゆうと、三十前の年増としまだ……年上の女に可愛がられていい気でいる奴もあれば、ずんと年下の男を滅法界めつぽうかいに好く女もあらあ——油断ゆだんがなるものか。第一、こちらからお豊のやつが上つて行く、上から若侍が下りて来る、ほかに誰がいた、証拠を押えたようなもんだ——お豊を隠しやがったな、あの若いのが」

金蔵の眼は、みるみる火のように燃えてゆきます。

金蔵は英雄でも偉人でもないけれど執念深い——執念のためには命を投げ出して悔いしない男である。思い込むと蛇のように執拗しつこくなる男であります。飛んでもない、人もあろうに宇津木兵馬は、この男の怨みうらみの的まととなつてしまいました。お豊と兵馬とは金蔵の留守の間に不義をした——と思ひ込んでしまった金蔵の怨みは、もう、誰がなんと言つても解けません。

「覚えてやがれ！」

この二月ふたつきほど真人間まにんげんに返って、驚くほど堅気かたぎになり、真黒く  
なつて家業に精を出し、和歌山へ行つたのも宿屋の实地調べで、  
これからますます家業へ身を入れようとした金蔵の心が、また  
もがらりと變つて、もとの無頼漢になるのです。

兵馬が旅日記を書き終つて、いま寝ようとするところへ、金  
蔵がやつて来ました。

「御免下さい」

言葉が荒つぽく、眼の色が血走つて立居たちいが穩おだやかでない。

「これは、どなたじゃ」

「へえ、金蔵と申しまして、こここの亭主でございます。お初はつに  
——いや、さつき竜神の石段でお目にかかったのは、たしか、あ

なた様でございましたな」

「左様、貴殿が御亭主でござったか、留守中お世話になりました」

「時に、あなた様——」

金蔵は眼に角かどを立てて、口のあたりが引きつり、呂律ろれつが怪しい、よほど飲んで来たものです。

「お前様のおっしゃるには、わしの女房のお豊は、うちへ帰っているはずでございますが、まだ帰っておりませんぜ」

「なに、御内儀ごないぎが……」

兵馬は金蔵の言いがかりぶりが無礼に見えるので、少し向き直り、

「まだお帰りが無い？ 拙者は、あの社内やしろうちでちよと会うたばかりだからその後は知らぬ」

「いつたい、お豊のあまは、何のために、この夜中に、あの社内へ出かけたものでござんしょうねえ、お武家様」

「何のためとは」

兵馬が、そんなことを知るはずはないのを、金蔵はからみつくように、

「お前様は、それを御存じであろうと、わしはこう睨んだのだ」

「なんと、拙者がそれを知っている？」

「そうでございます、あの、人も行かない淋さびしいところを、この夜中に、つまり人眼を忍んで、行きつ戻りつなさったのは、うちのお豊と、それからお前様のほかにはない」

「うむ」

「ですから、わしは、お前様とお豊とが、しめし合せて、なにか人に聞かれて都合の悪い話を、あそこで、おやりなすったも

のところが思うんだ」

「滅多めったなことを言われる」

兵馬は屹きつとなった。見れば酔つてもいるようだが、それにして聞き捨てならぬ一言である。

「ナニ、滅多なことが、どうしたんだ。さあ女房を出せ、おれの女房のお豊を出せ。前髪まへかみのくせに、ふざけたことをしやがる。どこへ隠した、早く、おれの女房のお豊を出せ！」

金蔵は、持つて来た脇差わきざしを抜いて振りかぶり、大胆にも兵馬をめがけて切つてかかりましたけれど、これは問題にもなんにもなりません、すぐに刃やいばは打ち落されて、兵馬の小腕こでんに膝の下へ引据ひきすえられ、

「無礼にもほどがある——店の衆——誰かおらぬか」

兵馬は金蔵を組み敷いておいて、声高く店の者を呼びました。

金蔵は家族や店の者が総出でつかまえて、欺しだま賺しすかつつ引張つて行きました。

父の金六は兵馬の前へ頭を下げて詫わびをする。兵馬は別に深く咎とがめるつもりはないが、言いがかりにしても潔いさぎよくない言いがかりだと思いました。

明日は宿を換えようと心に決めながら浴室へ行く、寝る前に一度、湯に入ることがきまりになっている。そこから浴室までは大分ある。

兵馬は手拭を持って長い廊下をしずしずと歩んで行く。お客が少ないから明間あきまが多く、蒲団ふとんや夜具ほうを抛り込んだままのもある——兵馬は足音しずかに行くと、そのうちの一間からふいに飛び出して廊下を横に切つて、忍び足にかけ行くものがある。

面は手拭でかくして手には何やら包みを持っています。<sup>かお</sup>

怪しい奴！ 兵馬は直ぐに泥棒だと感づきました。見のがせることではない——今しも、開け放してあつた雨戸の口から外へ出ようとする盗賊の襟首えりくびを持って引き下ろしました。

兵馬であつたからよい、ほかの者ならば、けたたましく、泥棒！ 泥棒！ と鳴りを立てるところです。兵馬に無言で引き下ろされて、泥棒の力のまた脆もろいこと、一たまりもなく引き倒されて、

「どうぞ、御勘弁下さいまし、お見のがし下さいまし」  
賊は手を合せて拝むと、兵馬はかえつてそれに驚かされました。

「おお、そなたは……」

「何もおつしやらず、どうぞ、お見のがし下さいませ」

「合点がてんのゆかぬこと」

この泥棒はお豊でした。兵馬には、なんだか実にわからなくなつてしまいました。

「これには深い仔細しさいのあることでございます、どうぞ、お情けに何もお聞きなさらず、このままお見のがしを願います、あとでわかることでございますから」

面をかくした手拭をとりもせずにお豊は、一生懸命で兵馬に見のがしてくれと歎願するのです。

「そなたの夫、金蔵殿とやらは、そなたを探しておられますぞ」「はい、金蔵に知れますと、わたしは殺されてしまいました、どうぞ、お慈悲に、このままお見のがしを願います」

見逃すべきであるか、捉とらえて夫に引渡すべきであるか、兵馬も、しばしその扱いに迷うたのでありましたが、あの無茶な乱



暴男、この有様を告げたら、なるほど、この女の言う通り女は殺されてしまうだろう、まあ、この場は見のがしておいた方がよかろうと兵馬も分別ぶんべつしました。

「どうぞ、お見のがし下さいませ、決して、あなた様のお身に御迷惑のかかるようなことは致しませぬ、一生の御恩でござい  
ます」

お豊は包みを拾い上げて、戸の外の闇へ飛び下ります。  
兵馬はそれを追いかける気になりませんでした。

十一

兵馬はその翌日、宿をかえた——兵馬には、こんなばかばかしいことにかかわっていられない。金蔵が恨もうと、お豊が帰

るまいと、別に心に残ることはなかつたが、兵馬が去つてから後の室町屋には大變が出来しゅつたいしました。

その晩のこと、金蔵が荒れ出あばした——その荒れ方も尋常ではない、一室に押込めて、家中総出で警戒していたにもかかわらず、金蔵はついに荒れ出して脇差を抜いた。それでもつて、支える奴を縦横無尽に斬り立てた。

父親の金六も手を負わされた、母のお民も斬られた。

それから、台所に飛んで出て、火を焚いていたおさんどんを蹴け飛ばして、その火を取つて投げ散らした——その火は障子についてめらめらと燃え上る。

血にじに染んだ脇差を振り廻して表へ飛んで出た。

たちま忽ちの間に湯元村をひっくり返すほどの騒ぎとなつた。

金蔵が血刀を引つかぶつて通りへ飛び出して、

「お豊、兵馬」

と名を呼んで二人を求めんと狂い廻る。兵馬はこの時、こんなこととは知らずに神木屋というのへ宿を替えて、その朝は、昨夜のあの護摩壇ごまだんへ行こうとして大師堂の傍まで来たのであったが、不意に火事よという声で振返つて見ると、すぐ眼の下、室町屋のあたりから黒煙が渦うずをまく。

兵馬も宿には大事のものが残してないではない。心にかかるからそのまま引返して湯元へ来ました。

火事は室町屋から出たので、今しも台所を吹き貫ぬいて、二階の廊下を焼き抜いて、真紅まっかの炎ほのおがメラメラとのぼる。

兵馬は神木屋へかけ戻つて、店の若い者と一緒に始末をして  
いる。

「室町屋の若主人が、急に気がふれ出した……」

兵馬は合点した。あの金蔵という奴が荒れ出したな——こうと知つたら、もう少し手厳てきびしく戒いましめておけばよかつたと思ひました。

けれども、金蔵は三輪でやらなかつたことをここでやるのですから、どのみち金蔵としては、やるべきことをやつてしまいました。お豊もまたあの時、金蔵を捨てるはずのを今ここで実行したものですから、お豊がなくなつて金蔵の執念が勃発ぼつぱつするのはあたりまえのことでありました。

兵馬は、それを知らないで、ただ無茶な乱暴男もあればあるものと思つています。

この火事は人家の方へ出なかつたけれども、それより悪いことは、山へうつつてしまつたことです。人家の火事は消しよう

があるが、山の火事は消しようがない——室町屋の裏手へつづく杉林に、それが燃えついたからたまりませんでした。

目通り何尺、高さ何丈という大木に火のついたほど始末に困るものはありません。登るには登れず、水をかけようにも下からは届かず。

それを防ぐには、伐り倒すばかりであります、と言って、それほどの大木を芋殻おがらを切るようなわけにはゆきません。

いよいよ杉山に火がうつった時、各字かくあざの者は手を束ねて、せめて、人家へ焼け出さないように用心するよりほかはありませんでした。

人が手を束ねて見ていれば、火はいい気になって延びる、この山を焼き抜いてあの山へと、遠慮なく延びる。

それでも竜王社の方面は消防に力をつくしたために火の手が

鎮まつたが、これはかえつて一方に火勢を追い込んだようなもので、山の手に向う火の手は更に一層の勢いを加えることになりました。木がなくなるところまで焼け抜いておのずから止まるか、そうでなければ、天の池が乾くほどな大雷雨でも来らぬ限りはこの山火事が続きそうだ。

にんげんわざ人間業でこの火を防ぐはあの護摩壇の法力ほうりきあるばかりだと、そこへ気がついた各村の総代は、打揃つて裸になつて水垢離みずごりをとつて、かの護摩壇の修験者へ行つて鎮火の御祈祷を頼むと、修験者は、

「遅い、遅い」

と冷淡に言つてのけた。

「昨夜、人知れず、御禊みそぎの滝で水を浴びた女をつれて来い……その女が竜神村の禍わざわいじゃ、その女をつれて来い」

さては、女の身でこの神聖な竜神の霊場をけがした者がある。その女を捉つかまえて、人身御供ひとみごくうに上げるでなければ、この火は鎮まらぬ、火を消すよりも、その女を求めることが急だ。

土地の人は血眼ちまなこになつて飛ぶ——

その女というのは誰——火を出した室町屋の女房、昨夜から行方知れずになつたというお豊が怪しい。お豊はどこへ行つた。室町屋の内儀はどこへ行つた。

兵馬はこの時、ぜひなく神木屋にとどまつて火を心配していた——今日あたりは七兵衛お松がこの地へ着くはずであるのに、あの火が道をふさぎはすまいか。

昨夜から降つたり止んだりしていた雨が、この時分になつて、だんだん大降りになつてきた。

その翌朝、山火事はいよいよ盛んに燃えている。雨もどんど

んと降りつづいてゐる。お豊を探すべく八方に飛んだ人がまだなんとも報告を齎もたらさないうちに、またしても人を驚かす報告が一つ持ち来きたされた。

「河原に人が殺されている」

それを見つけたのは里の子供でした。村の人が駈みずかさけつけて見ると、昨夜来の雨で日高川の水嵩みずかさが急に増した。蛇籠じやかごにひつかかった一つの体はまだ若い男でありました。

「室町屋の金蔵さんだ！」

「斬られてる！」

それはたしかに金蔵である、斬られていることも確かである。宇津木兵馬は宿の人に頼まれてその検視に行った。

兵馬が金蔵の死骸しがいを見て衷心ちゆうしんから驚いたのは、その死にぎまが怖ろしいからではない、また彼の身の成る果てふびんを不憫と思ひ



やつたからと、いうのでもない、その斬口きりぐちの鮮あざやかさ！ 心得ある人より見れば、斬口でその斬った人の手腕がわかる、否いな、手腕のみではない、それが何流の剣道に出でてどの程度まで行った人だということもわかるはず。

右の肩から真直ぐに、それは力任せにやつたのでも何でもない——冷笑しきつて軽く一振り、曳えいとも言わず二つに切つて落すべきものを落さずに、いくらか残しておいて刀を鞘さやに入れたが、おそらく血は刀に附く違いとまがなかつたらう——切ると一緒に高いところから足で蹴落けおとして（その証拠には、かすり疵きずがいくつもある）、下へ転ころがって行く屍体の音を聞きながら、蚊をつぶしたほども思つてはいなかつた——兵馬の眼には、斬った人の面影おもかげがありありと浮ぶ。

眼の前にあつても、時が来らねば会えませぬ。竜之助と兵馬とは、山城、大和、伊賀、紀伊の四カ国を、あとになり、先になつて、往きつ戻りつしましたけれど、とうとうそのいずれでも会うことができないのです。竜之助は敢て兵馬を怖れて逃げ隠れているのではない。兵馬は目の先に近づいて、それでどうも刃を合せることができないのです。

今、ここに竜神村の災難、七兵衛やお松がどうしてここへ来るかを知らねばなりませんけれど、兵馬はそれを顧みているではない。

竜之助の落ちて行く方面は、日高川に沿うて四十余里の屈曲を塩屋の浦まで出て、船でどちらへ行くか、または高野領を経

て西国筋さいこくすじへでも落ちるか、兵馬はそれを測って单身結束してそのあとを追わねばならぬ。

兵馬が竜神村を立った時も、まだ竜神村の火は消えませんでした。

大菩薩峠 竜神の巻

底本：「大菩薩峠 2」ちくま文庫、筑摩書房  
1995（平成 7）年 12 月 4 日第 1 刷発行  
1996（平成 8）年 2 月 15 日第 4 刷

底本の親本：「大菩薩峠」筑摩書房  
1976（昭和 51）年 6 月初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：(株) モモ

校正：原田頌子

2001 年 5 月 30 日公開

2004 年 3 月 6 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。